

令和7年度 静岡大学教育学部附属静岡中学校 学校評価書

学校教育目標
【校訓】真善美 自主独立 【学校教育目標】「よりよいものを求めて語り 高め合う」

項目	目標・取組	評価指標	自己評価	診断・分析	学校関係者評価
学校経営	自己を磨き 他とともに高め合うことのできる資質・能力を育む。	・校訓「真善美」「自主独立」や学校教育目標を基盤とした学校生活の充実を図る。 ・主体的な人間を育む、特色ある教育活動の実施に向けて、生徒自らが、教科の本質を協同的に学ぶ授業の実践及び生徒の主体性を尊重した特別活動の実践を行う。	A A	・「校訓を意識した活動」については、生徒の96%、保護者の97%が肯定的に回答した。「授業で考えが深まっている（広がっている）」と感じている生徒は83%、「授業が楽しい」と回答した生徒は88%（※「概ね」を含む）であった。また、「特別活動を通じて充実した学校生活を送れている」と感じている生徒は94%と、いずれの項目においても高い肯定率が示された。	・授業参観や教育協議会における生徒の様子から、豊かな発想に基づき、仲間と活発に意見を交わす姿が見られた。 ・校訓や教育目標を生徒にもわかりやすくするために副題のようなものをつけてもよいのではないかと。
	誰もが安心して生活できる学校づくりを行う。	・よりよい人間関係を築くための道徳や学活を定期的に位置づけて行う。 ・校務委員会（毎週実施）において諸問題の情報共有及び対策や支援の方法を検討する。 ・いじめ防止に向け、道徳・学級活動の充実及び定期的なアンケートを実施し確実に100%対応する。 ・いじめ案件は、いじめ対策委員会にて100%対応する。 ・「いじめはどんな理由があっても許されないことである」と回答する生徒を100%に近づける。 ・特別な配慮が必要な生徒への支援を充実させるため、毎週水曜日に生徒支援委員会を行い支援策を検討する。 ・必要に応じて、ケース会議（SC/SSWを含める）を行う。 ・毎月の安全点検の実施（校舎内外）を行う。 ・移動の際は、普通教室の施設をする。 ・警察や外部機関との緊密な連携を図り諸問題の可決を行う。	A A A	・よりよい人間関係を築くための方策の一つとして、大学の協力を得ながら、全学年で道徳の授業においてレジリエンス教育を実施した。 ・毎週生徒支援委員会や校務委員会において、心配な生徒の情報共有し、支援方法や対応策を協議した。特に支援が必要な生徒については、校内ケース会議を実施するとともに、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）、放課後デイサービスの職員など専門家を交えたケース会議も行った。また、必要に応じて病院の医師とも連携し、生徒への対応について助言を受けた。 ・「悩みごとアンケート」を他校より多い4回実施し、気になる記述のあった生徒にはすべて個別に対応した。 ・i-Filterで「自殺」「家出」などの検索ワードに該当した生徒については、迅速に面談を行うなどの対応を実施した。 ・「いじめは許されない行為である」と認識している生徒の割合は91%であり、今後も100%を目指して継続的に指導を行っていく。 ・安全点検を毎月実施し、修繕が必要な危険箇所については大学の施設課と連携し、迅速に対応している。 ・消防職員を講師として招き、救急車の要請が必要となる事故を想定した教員向け訓練を実施した。 ・静岡中央署のスクールサポーターが定期的に校内巡視を行い、管理職と情報交換を行った。 ・毎週、情報教育戦略部会を開催し、学習用端末に関する諸課題への対応を図った。学習用端末の正しい使用方法については、担当教員が定期的に指導を行った。また、年末からは端末の使用を制限し、生徒が使用方法について考える機会を設けた。 ・生徒が安全に過ごせる環境を整えるため、用務員を中心に施設修繕に努めている。しかし、校舎や設備が老朽化しているため、さらなる修繕が必要であり、十分に整っている状況とは言えない。	・近年、さまざまな個性をもつ生徒が増えており、今後も一人ひとりに丁寧に関わりを深めた対応が求められる。また、保護者との早期の情報共有は信頼関係の構築に不可欠であり、引き続き意識的に取り組んでいきたい。併せて、生徒が安心して過ごせる居場所づくりを継続するとともに、キャンプなど、生徒が学校に行きたくなくなるような魅力ある仕組みづくりにも工夫を重ねていく必要がある。 ・日々の関わりを大切に、信頼を積み重ねていく姿勢は、教育活動の基盤となる。また、学習用端末の使用については、生徒自身が「使うべき場面、使わない場面」を考える授業を行うなど、主体的に判断させる機会を設けることも重要である。一方で、生徒に考えさせるだけでなく、教師が主体的に発信し、方向性を示す場面も大切にしてほしい。 ・先生方が日頃から保護者への連絡を丁寧に行っていること、良好な信頼関係が築かれていること、その積み重ねが学校全体の安定に大きく寄与している。
	積極的かつ迅速な情報提供を行うとともにDX化を推進する。	・学校HPやメール配信・電話等による、保護者への情報提供を迅速かつ積極的に行う。 ・学校安全マニュアルをHPに掲載し状況に応じてアップデートしていく。 ・感染症や防犯対策について、学校の対応を迅速に伝えるために電子媒体等を通して発信する。※紙媒体での配布を原則とする。 ・学校だよりを定期的に電子媒体で発行する。 ・「絆システム」を活用した保護者との情報共有を図る。 ・保護者への配布物は電子媒体で配信する。 ・情報教育戦略部をより充実させ、ICT機器による教育活動の充実をより図る。 ・情報教育戦略部による学校広報活動の充実をより図る。 ・教員、保護者・生徒アンケート等はgoogleを活用して処理時間を短縮する。 ・生徒作成資料は端末を活用する。	A A A	・欠席や相談事項については、保護者の生活スタイルに合わせて、きずなネットシステムでいつでも入力できるようにした。教員も随時内容を確認できる体制を整えている。 ・インフルエンザや新型コロナウイルスに関しては、治療報告書をWEB上で提出できるようにし、多くの保護者に活用していただいている。 ・年間を通して、学年だよりや毎月の行事予定をメール配信およびホームページで発信した。 ・教員・保護者・生徒を対象とした各種アンケートはGoogleフォームを活用した。生徒間アンケートも同様にGoogleフォームを使用し、事務処理時間の大幅な短縮につながっている。 ・授業中だけでなく、生徒は学習用端末を積極的に活用し、プレゼンテーション資料やポスターなど多様な作品を作成している。一方で、学習目的として適切でない使用をする生徒も見受けられるため、今後も継続的に指導を行っていく。	・情報はできるだけ早く共有することで、より良い方向へ導ける場面が多い。今後も多様な手段を活用し、保護者をはじめとする関係者への丁寧かつ迅速な発信に努めてほしい。 ・ICT活用に関しては、ファクトチェックを含む情報リテラシーの向上が重要である。学習用端末を「使うべき場面」と「使わない場面」を明確にし、メリハリのある授業を展開することが求められると考える。
	大学の専門性を生かした授業を行う。	・大学教員と連携した総合的な学習を実施する。 ・大学教員と連携したレジリエンス授業を実施する。	A A	・3年生の「探究」では、大学教員に7つの講座を開講していただき、専門分野の学びを深めることができた。 ・大学教員と連携した授業の中で、レジリエンスに関する講話を伺った。また、全学年で道徳の授業においてレジリエンス教育を実施した。 ・レジリエンスに関する資料をもとに、心配な生徒への支援策に活用した。	・早い時期から本物を体験させることは大変重要である。そういった意味でも大学教員の授業はとてもよい取組である。
	地域や学校をサポートする団体と連携する。	・「シズクリ」を通して地域企業と連携し、生徒のキャリア教育を行うとともに地域の教育活動の充実へ寄与する。 ・「しず部」と連携しながら、今後の部活動の在り方を考え、生徒に必要な活動の機会を提供していく。 ・地域や教育活動を行っている団体へ施設の提供をしていく。 ・スクールサポーターや児童相談所など外部機関との連絡を密にして、多くの機関と連携し生徒の成長を支援する。	A A A	・1年生と2年生の総合的な学習では、シズクリと連携し（1年は「フューチャー」、2年は「エンジン」、企業人と直接話す機会や企業への提案をプレゼンテーションを通して行った。これにより、現在の社会課題や将来の展望を知るとともに、自身の将来の生き方について考えることができた。 ・1月末には、代表グループが静岡県大会において企業に対してプレゼンテーションを行った。 ・「しず部」に学校施設を提供するとともに、生徒に活動の機会を提供している。また、本年度よりベルテックス（バスケットボール）のスクール生にも施設を提供している。 ・本校卒業生の大学生を学校に招いて、附属中や将来の進路について話し合いを行った。	・卒業生である大学生と交流した活動は大変良い活動である。交流を通じて、将来を考へたり、附属中の伝統について考えたりすることができる。今後も継続してほしい。
	静岡市教育センター及び静岡市立学校との研修交流等をより推進する。	・可能な限り他校の研修会に参加し、自校の研修を俯瞰したり、研究成果を発信したりする。 ・静岡市立小中学校教員へ教科指導法及び授業作成の助言を行う。 ・市内中学校等との研修交流の機会を増やし、本校の研究を深める。	B	・多くの教員が、可能な限りさまざまな研修会へ参加した。また、市内外の中学校から本校職員に研修参加の依頼があり、他校の研修会に参加することで交流の機会を得ることができた。	単に「交流する」「情報交換する」だけでなく、助言したり、研究の成果を広めたりする機会があるとさらによい。
	小学生にとって魅力ある、憧れをもつ学校にする。	・本校の教育活動をHPやポスター、学校公開日を通して、積極的に紹介していく。また本校生徒による本校の魅力発信の機会を設ける。 ・小学生や保護者にとって魅力ある教育課程に改善していく。 ・教育環境を整える。	A	・本年度も、生徒に本校の生徒募集ポスターを作成してもらい、市内の小・中・高に配布するなど、積極的に広報活動に努めた。 ・学校公開日には延べ800人の参加があり、本年度の受験者数も増加した。 ・授業の様子や附中生がくり上げた行事などを学校ホームページで紹介し、附中の魅力発信した。	・他校とは異なる「附属らしさ」を前面に押し出してPRしたい。伝統的に多様性を認める点が附属静岡中の良さであると考えられる。そういった点をアピールしていけるとよい。
教職員にとって魅力ある、憧れをもつ学校にする。	・会議の効率化と事前資料配付するとともに、会議終了時刻等を設定する。 ・ICTを用いた更なる作業の効率化を推進する。 ・毎日の退勤時間を設定し、仕事の軽重を意識して仕事の効率化を促進し、予定どおり退勤できるようにする。 ・学校行事等教育課程の見直しを行う。 ・業務内容を20%削減（令和4年度比較）を目指す。 ・全職員が県外の協議会参加の機会を設ける。 ・全職員が県内学校（私立含む）との交流の機会を設ける。 ・大学、企業、国研調査官等と交流の機会を設ける。 ・分掌長等は自己推薦とし、新しい組織を作ることを推進する。	A B	・会議の終了時刻を明示したり、お知らせはチームズに入力しているようにPC上で提示した。各種アンケートもGoogleフォームで実施し、集約業務の負担軽減につなげた。 ・今後、新たな校務支援システムを導入し、事務作業の時間短縮が図れるよう環境を整えていく。 ・労務職員に印刷業務やアンケート集計などを依頼することで、教員の事務的な作業を削減している。 ・半数近い職員が県外協議会へ参加したが、全職員が県外協議会へ参加することはできなかった。 ・研究協議会や総合的な学習等の機会を通して、様々な外部の方と関わりをもつことができた。	・教員と生徒のよい人間関係を作ると同時に、教員には良い家庭人としてもいてほしい。そのためにも一層の働き方改革を進めてもらいたい。 ・生徒の登校時刻についても検討してもよい。	
教育学部との連携協力を強化し、地域の教育界に貢献できるような先導的・実験的な教育研究を推進する。	・教育学部の共同研究者と連携し、外部の有識者等に助言をいただきながら、学習指導要領の目指す先導的な教育研究を実践する。 ・教育研究協議会や研究紀要の配付・公開等を通して、研究の成果を広く発信する。 ・先進講話や自主的教科研究会、全校研究授業・群研究授業の地域公立校への公開等を通して、本校の取組を発信する。 ・出身地教委との交流研修の実施、静岡市教委研修会への参加等により、地域との協働を推進する。 ・各教科等において大学教員と連携して教育研究を推進し、論文等で成果を発表する。 ・本校を転出するまでに、センター紀要等の執筆を行う。	A A A B B	・研究発表会を全教科で実施した。奈須先生（上智大学）や村山先生（静岡大学）、国研の調査官、静岡大学の先生、市教委指導主事をはじめ、多くの先生方に助言・参観・協議していただき、参加者は400名を超えた。 ・今年度も研究紀要は発刊せず、来年度の書籍発刊に向けて準備を進めている。 ・次期研究主題の決定に向けて、大学教員2名を招いて講話をいただき、今後の研究の方向性を考える機会を設けた。 ・保健体育科では、元プロバレーボール選手の荒木恵里香氏を招き、プロスポーツについて話を伺った。 ・英語科では静岡大学の留学生との交流を行ったほか、フィリピンとインドの生徒とWEB交流を行う授業を実施した。	・本年度も研究協議会を参集形式で開催し、子どもたちの学び姿や附属中の提案する授業を多くの方に見ていただけたのはよかった。今後も生徒が本質を深く追究していける授業を研究していきほしい。 ・学習用端末と関わるだけでなく、人と人が関わる授業を今後も大切にしてほしい。	
教育実習	・教育実習を通して教職の魅力ややりがいや伝え、実習後に教職に就きたいという学生を増やす。 ・教員として常に学び続けることの重要性を伝える。 ・教育学部における教職キャリア形成プログラム全体を見通した効果的な実習や講義を提供する。 ・生徒と教員と接する機会を増し魅力を伝える。 ・教職大学院実習において、より高度な実践経験の場を提供し、高い資質・能力を備えた教員養成に貢献する。	B A A	・本校教員が大学に出向き、具体的な授業づくりや生徒への接し方など、実践的な講義を大学生に対して行った。 ・教育実習では、「教員になりたい」という気持ちが高く、なった学生は54%、変化なしが26%であった。放課後に担当教員と実習生が話し合う時間を長く設けるなど、教育実習を通して学校生活の魅力や教員の仕事の魅力を伝え合っていると感じるが、数値としては改善が見られなかった。 ・基盤実習生や養護実習生は目的意識が明確であるためか、全員が高度な実践研究・実習に取り組むことができた。 ・今後も、より教員の仕事が伝わるよう、教育実習の在り方について検討を進めていく。	・大学教員との連携は本校の特色の一つである。今後も継続して取り組んでほしい。 ・教育実習は本校のミッションの一つであり、現在の教員不足の状況改善に貢献できるような、引き続き力を入れてほしい。	

学校評価総括
伝統ある校訓や学校教育目標に基づいた学校運営が着実に進められ、生徒や保護者からも一定の評価を得られたと考えている。また、安全対策や教育相談体制の整備など、生徒が安心して学校生活を送れる環境づくりも、ハード・ソフトの両面で充実してきた。一方で、ICT機器の活用方法や、生徒が使用する際の指導については、今後も継続して検討していく必要がある。

次年度に向けて

学校を取り巻く社会状況や価値観、生徒の実態は急速に変化している。こうした変化の中で、個々の多様性を受け入れ、尊重し、すべての生徒が自分の居場所や存在意義を実感できる環境づくりに努めていきたい。また、生徒が夢を抱いて過ごせる附属学校ならではの魅力をさらに高めるとともに、次年度から始まる新たな研究を学校全体で意欲的に推進し、その成果の積極的な発信にも取り組んでいきたい。